

2025年4月20日 日本聖公会 川越基督教会 資料委員会頼り 13号
追加資料

2) 「川越に吹いた西洋の風～保存資料は語る」 ドゥエル・ベーリ著

図2 2011川越火力発電所（1911（明治44）年）、埼玉県の配電線による電灯供給、電気ゆかりの地を訪ねて, vol 21

埼玉県初の配電線による電灯供給 川越火力発電所

- 住所
川越市三久保町 17-4
- 交通アクセス
西武新宿線
本川越駅 約1km

■埼玉県初の配電線による電灯供給

明治37年(1904)12月31日*、川越電気鉄道株式会社は、川越町大字川越字堅久保1119に設置した川越火力発電所から町内へ、埼玉県初の配電線による電灯供給(431戸)を始めました。

*当日は試験送電で、翌日(元旦)が正式の供給開始日であるという記述もあります。(埼玉の電気物語)

これは、東京・日本橋における日本初の電灯供給開始から17年後のことでした。

この会社は、前年(明治36年)に設立された川越電灯と川越馬車鉄道が合併したもので、合併時から電気供給事業と川越~大宮間の電気鉄道事業の二つを目的としていました。電灯供給の開始は、鉄道開通の2年前でした。

■当時の地図での場所

図1は、川越電気鉄道が電灯供給を始めてから3年後、明治40年(1907)の大日本帝国陸地測量部発行の5万分の1地形図です。

発電所の位置は、中央の赤丸印で囲った発電所マークのところ です。

発電所から電車が右側に延びていますが、これは前述した川越~大宮間(約13km)の電車で、線路は東京中野の鉄道大隊が実地演習として手掛

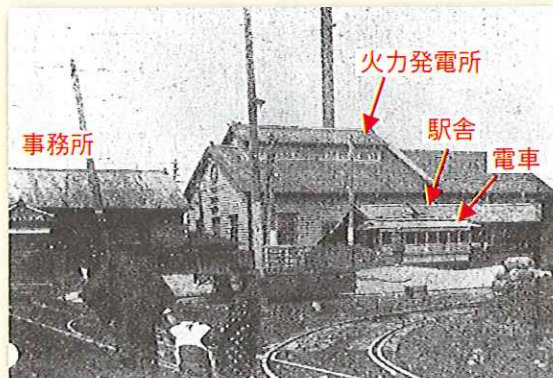


写真1 明治44年の川越火力発電所と駅舎

- ・煙突のある建物が火力発電所
- ・発電所建物手前に、駅舎と電車がみられます。
- ・線路はループ状になっていて、電車は駅舎前を一廻りして駅舎に入りました。

(出典 「ふるさとの思い出写真集」 国書刊行会)

け、3ヶ月で竣工させています。車輛は東京市電から払下げを受けたものを使用しました。

*同線は、昭和16年(1941)、国鉄川越線開通に伴い廃線

■現在の状況

明治時代の地図(図1)を参考に、現在の地図(図2)において発電所の位置を追うと、喜多院の位置と道路区画に注目することで「川越火力発電所跡」と記した赤丸印のところに なります。



図1 明治40年の地形図(大日本帝国陸地測量部) 国土地理院旧版地図(川越)使用



図2 現在の地図 国土地理院2万5千分の1地形図使用

現地を訪ねたところ、川越火力発電所があったと思われる場所には、東京電力株式会社の川越支社があり、住所は三久保町17-4でした。



写真2 川越火力発電所跡(現東京電力川越支社)
発電所は、支社建物の右の方にありました。

辺りを調べたところ、川越支社の建物前に市内の名所案内を兼ねた「埼玉県電灯発祥の地」の説明板がありました。

この説明板には「川越火力発電所跡地」と「川越電気鉄道」について記述されています。その内容を紹介します。

「<川越火力発電所跡地>

東京電力川越支社は、かつては川越火力発電所でした。明治三十七年(1904年)埼玉県下で初めての石炭火力発電所として100kW発電機二台を使用し、川越町での電灯供給を開始しました。

<川越電気鉄道>

発電所でつくられた電気を使い、明治三十九年十月には、川越～大宮間を結ぶ電気鉄道が開通し、チンチン電車の愛称で親しまれました。なお、駅の跡地は川越市立中央公民館となっています」



写真3 川越支社前に設置されている説明板

また、川越市内名所案内図の隅に「昭和2年(1927)頃の久保町駅構内と駅前図」が描かれていました。明治44年の写真1と比較出来ることから、部分カットし、写真4として示しました。

なお、川越支社の職員の方に、当時を偲ぶよう



写真4 昭和2年頃の久保町駅構内と駅前図
発電所、駅舎、線路などの位置が、写真1(明治44年)と変わっていないことが分ります。

現地説明板に描かれている図の一部を抜粋

な遺構などの有無をお聞きましたが、見当たらないとのことでした。

■発電所の設備概要

この頃の電力(電灯)供給では、交流を用いることが多くなっていましたが、直流を採用しています。これは、電気鉄道には直流を用いることから、これに合わせたことが推察されます。

- ・汽缶 国産の宮原式ボイラー(燃料は石炭)
- ・汽機 150馬力×2基、
- ・発電機 直流210V、100kW×1台(電灯用)
直流550V、100kW×1台(電車用)

■発電所のその後

翌々年(明治39年)、大宮電灯を合併したことによる大宮方面への供給が増えたこと、また、陸軍所沢飛行実験場建設のための供給要請などもあり、明治40年(1907)、当初の設備とは異なる交流発電機(180kW、3kV、50ヘルツ)1台を増設しました。また、この増設に合わせ、配電線も交流の3kVに昇圧しました。

その後、会社は、大正2年(1913)、神流川水力電気会社と合併し武蔵水電会社と名称を改め、漸次水力発電に切り替えました。大正11年(1922)、帝国電灯に吸収合併され、この時に鉄道部門は切り離されました。大正15年(1926)、東京電燈に吸収合併されました。

ところで、発電所の稼働期間については、明確ではありませんが、写真4の図に発電所や石炭置場が描かれており、昭和2年頃にも在ったこととなります。23年以上の稼働になり、この頃には予備設備であったことが推察されます。